



TITLE:

果して彗星界は賑やか

AUTHOR(S):

山本, 一清

CITATION:

山本, 一清. 果して彗星界は賑やか. 天界 1939, 19(219): 259-262

ISSUE DATE:

1939-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167839>

RIGHT:

果して彗星界は賑やか

山 本 一 清

(1)

自分は、今1939年初頭に於いて、この年内の彗星界が久しぶりに賑やかとなるだろうと豫告し、其のうちに、回歸し来る短週期彗星のみにても、キンネケ、コプ、ボレリ、ブルクス、タトルの五つのものが期待されることを注意したが、今や此の1939年の半ばにも近づかんとするに當り、果して、既知や未知の彗星が世界各地に於いて發見され、學界は愈々多忙の時期に入らんとしてゐる。

試みに、今日までに既に發見された彗星を、其の發見順に挙げると、

1. 1939 a. コジク・ベルテヤ彗星. (新彗星)
2. 1939 b. ヴイサラ彗星. (新)
3. 1939 c. キンネケ彗星. (舊彗星の再歸)
4. 1939 d. ユーアロフ・アシマロフ・ハセル彗星. (新)
5. 1939 e. コプ彗星. (舊)

(2)

まづ最初のコジク・ベルテヤ彗星といふのは、本年一月中旬頃にソ聯邦のコジク Kozik 氏と、米國オハヨ州のベルテヤ Peltier 氏とが、別々に此の星を發見したものであることは、既に本會の急報や天界に記した所である。此の星は、今までに既に二ヶ月以上も連續觀測せられ、軌道の性質も可なりよく判明してゐる。マクスエル、コジク、ブルチビルスキ諸氏の算定によれば、此の星の軌道要素は、ほゞ下の如きものである。

近日點通過	1939年2月6.85 (世界時)
近日點引數	169° 2'
昇交點黃經	288 45
軌道西傾斜	63 32
近日點距離	0.7165 單位
離 心 率	0.995

} 1939年頭の分點

之れで見ると、非常に週期の永い新彗星であるらしいが、尤も此の點は今はまだ確言が出来ない。星は既に遠く南半球に去り、我が地球からも遙かに離れ、光度も淡くなつて了つたから、今後、観測は困難である。

(3)

第2番目のヴィサラ彗星といふのは、いささか珍しい經歷を有つ星である。此の星は、もともと去る二月8日の夜、北歐フィンランド國のトルク1 Turku 天文臺に於いて、ヴィサラ Väisälä 氏が寫眞機により小遊星を觀測中に發見したものであつて、星像も普通の小遊星らしいものであり、位置も太陽の反對側にあつたものだから、初めは之れを全く一新小遊星として、學界は一般に之れを正規の手續きにより“1939 CB”といふ假りの名を與へたのであつた。ところが、ヴィサラ氏等は此の星の觀測を其の後數週間にわたつて續行するうち、三月中頃に至つて、之れが小遊星ではなくて、寧ろ一新彗星であることを知るに至り、皆々多少の驚きを以つて此の報知を見たのであるが、其の後トルク1天文臺ではオテルナ Oterna 及び ヴィサラ兩氏の名を以つて、下記の如き軌道要素が發表された〔B. Z. 9 及び I. A. U. C. 754〕：

E 元 期	1939年2月9.000 (U.T.)
M 平均進度	352° 35'
ω 近日點引數	44 22
Ω 昇交點黃經	135 30
i 軌道の傾斜	11 04
φ 離心率角	38 38
μ 平均運動	352'' .8

この軌道要素だけから考へると、彗星とするよりも、寧ろ、やはり、小遊星とした方が好ささうである。只、發見者の報告には星霧狀で、中心核無しとあるし、又、米國ヤキース天文臺のバンビースブルク Van Biesbroeck 教授の報告によつて見ても、“此の星の頭部は光度約15等級で、廣い微光の尾が長さ1°に延び、其の方向角は140°である”とあるから、さうした性質上、彗星の部類に入れて置くべきものか？ 週期は約10年である。要するに、之れは、かのシヴスマン・ワハマン彗星 1925 II と同様、小遊星と彗星の“あいの子”のやうなもので、今後毎年觀測が可能であらうと思はれる。只、光度が淡いので、小

い望遠鏡では観察が出来ない。

(4)

本年度の第3彗星は、かの有名なボン・キンネケ彗星である。勿論、之れは早くから待望せられてゐたものであり、出現位置の豫報も、大英天文協會のハンドブック等に掲載されてゐるものである。大望遠鏡を有つ人々は年初から此の彗星を搜索したのであるが、榮冠は遂に米國リク天文臺のジェファス氏に歸した。ジェファス氏は去る三月17日に此の星を17等級の微光星として、クロスリ反射鏡の寫眞原板により、發見したものである。今後、太陽や地球に近づくと共に、光度も7等級ぐらゐには上るだろうが、天空経路は“天界”5月號に圖示してある通り。こんどは此の星の第13回目の出現である。

(5)

次に、1939 d 星は、我が國に於いては、倉敷の岡林氏が四月23日の夜にペルセウス星座に於いて發見した星である。しかしながら、後に判明した通り、此の彗星は其れより約1週間以前の四月16日に、北歐ノルウェー國のハセル Hassel 氏が發見したもので、此の發見報はオスロ大學のロスランド教授からコペンハーゲン中央局に知らされたため、世界は一齊に觀測を始めた。ところが、其の後、間もなく判明した所では、此の彗星は既に四月15日にソ聯邦のアマチュア天文家アシマロフ Achmarof 氏がバレシノ村で發見し、直ちにブルコワ天文臺に電報で知らせたものであるし、更に又、同じ15日に、ソ聯邦フォトキンスク市のユアロフ Jurlof 氏が發見して、ブルコワ天文臺へ手紙で報告したものであることが判つた。こんなわけで、此の星は歐洲では

“Comet Jurlof-Achmalof-Hassel” (1939 d)

と呼んでゐるが、わが岡林君も、四月23日に之れを獨立發見したのであるから日本では

“ユアロフ・アシマロフ・ハセル・岡林彗星”

と呼んで好いわけである。

この1939 d 彗星は、初めから光度が大きかつたのと、夕刻の西空に現はれる其の位置の便利のため、上記の如く、發見者が4人も現はれたのであるが、軌道は、デンマルクのメラ I Möller 氏が逸早く發表した下記のものが、比較的

良いものであるらしい:

近日點通過	T	1939年4月10.266 (U. T.)
近日點引數	ω	$89^{\circ} 11' 2''$
昇交點黃經	Ω	310 51.8
傾斜角	i	138 26.9
近日點距離	q	0.52946 單位

近日點距離が極めて小さいため、光度も大きく、長い尾も現はれたのであるが、今後は急に地球から離れて行くことになつてゐる。しかし、来る八月初めに、地球は此の 1939d 星の軌道の近くを通るので、特別な流星雨が南天から現はれるかも知れない。

(6)

本年度第5番目の彗星は“コブ彗星”で、去る四月22日に米國ヤークス天文臺のダンビースブルク教授が発見したものである。光度は13等級と報ぜられてゐるが、今後、殆んど之れは増光しない。(1939. 5. 29. 北京旅舎にて記す)

照 照 照

マクドナルド天文臺開設式

米國テキサス州立大學のマクドナルド記念天文臺は數年前から建築や設備を急いでゐたが、今般いよいよ完備したので、去る五月5日盛大なる開設式を舉行した。我が山本會長へは式に參列されるやう丁寧な招待狀が年初に到着したが、多忙であり、又、遠路のため、會長は祝電だけを送つた。元來此の天文臺はマクドナルド W. J. McDonald 氏が同大學へ寄附した紀念資金により建設されたもので、米國クリヴランド市のワナ・スエーヂ會社製作の口径82吋の大反射鏡を主として設計され、臺長は、ヤークス天文臺長ストルフェ教授が兼任することになり、従つてテキサス大學とシカゴ大學との協同、即ちマクドナルド天文臺とヤークス天文臺との間に學者や器械の緊密なる協力と交流とが行はれる筈になつてゐる。式は、ワナ・スエーヂ會社副社長 C. J. Stilwell 氏の報告、臺長 O. Struve 氏の收受につき、シカゴ大學總長 R. M. Hutchins 氏の講演“協同研究”、カナダのギクトリヤ天文臺の名譽臺長 J. S. Plaskett 氏の“新反射鏡の特徴”、シカゴ大學教授 A. H. Compton 氏の“理學の最初”等があつた。